

# 森美術館開館20周年 2023年度企画展スケジュール

通過点であり、ひとつの節目としての20年。  
森美術館のミッションを再訪し、過去・現在・未来の時間軸を往来する。

森美術館は2023年に開館20周年を迎えます。当館のミッションは、現代性と国際性を追求しながら、複雑かつ多様な世界との出会いの場となることです。この20年を振り返ると、私たちが生きる世界は政治的にも経済的にも大きく変化しました。また、大規模な自然災害も頻度を増し、感染症のパンデミック、内戦や戦争など予想を超えた事態も起こっています。現代アートはこうした世界のさまざまな様相を映し出しています。

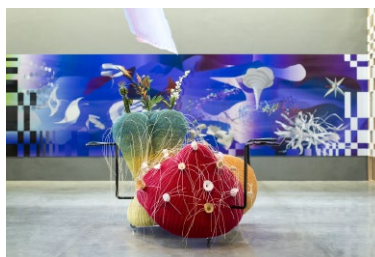
2023年度の2本の展覧会およびラーニングプログラムでは、森美術館のミッションを再訪し、過去・現在・未来という時間軸を往来します。上期の「ワールド・クラスルーム：現代アートの国語・算数・理科・社会」展では、現代アートを学校の「美術」や「図画工作」という科目から解放し、「世界」について学ぶあらゆる科目に通底した領域として捉えます。そして、現代美術館はすべての人に開かれた「世界を学ぶ教室」となります。また、本展は企画展では初めて森美術館のコレクションが出展作品の半数以上を占めることとなり、これまでの当館の展覧会を振り返る機会にもなります。下期の「私たちのエコロジー」展では、今日グローバルに最も喫緊の課題のひとつ、気候変動問題を含め、地球全体のサステナブルな循環を、現代アートとの関わりの歴史も踏まえて考えます。

20年は通過点にすぎませんが、ひとつの節目です。次の20年を見据えながら、変化する時代のなかで森美術館が果たすべき役割をあらためて考える年にしたいと思います。

森美術館 館長 片岡真実

## 森美術館開館20周年記念展 ワールド・クラスルーム： 現代アートの国語・算数・理科・社会

会期：2023年4月19日[水] - 9月24日[日]



ヤン・ヘギュ  
展示風景：「ヘギュ・ヤン：コーン・オブ・コンサーン」  
マニラ現代美術デザイン美術館 2020年  
撮影：アット・マキュランガン  
※参考図版

## 森美術館開館20周年記念展 私たちのエコロジー

会期：2023年10月18日[水] - 2024年3月31日[日]



アグネス・ディーンズ  
《小麦畑—対立：バッテリー・パーク埋立地(マンハッタン、ダウントウン)—小麦畑に立つアグネス・ディーンズとともに》  
1982年  
Courtesy: Leslie Tonkonow Artworks + Projects(ニューヨーク)  
撮影：John McGrail

※「ヘザウィック・スタジオ展：共感する建築」の会期は、以下のとおり変更となりました。  
【新会期】2023年3月17日[金] - 6月4日[日]

プレスリリース お問い合わせ 森美術館広報事務局(共同ピーアール内)：日比、松川、花上  
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

## 森美術館開館20周年記念展

## ワールド・クラスルーム：現代アートの国語・算数・理科・社会

会期：2023年4月19日(水)－9月24日(日)

会場：森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）

主催：森美術館

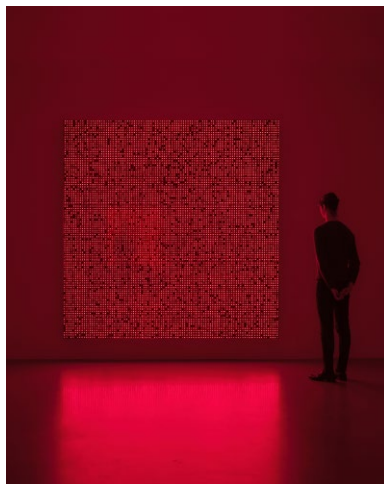
企画：片岡真実（森美術館館長）、熊倉晴子（森美術館アシスタント・キュレーター）、ほか

現代アートが世界各地の複数の観点から考えられるようになった1990年代以降、現代アートはもはや学校の授業で考える図画工作や美術といった枠組みを遙かに越え、むしろ国語・算数・理科・社会など、あらゆる科目に通底する総合的な領域と捉えるべきものとなっています。それぞれの学問領域の最先端では、研究者が世界の「わからない」を探求し、歴史を掘り起こし、過去から未来に向けて新しい発見や発明を積み重ね、私たちの世界の認識をより豊かなものにしていきます。現代アーティストが私たちの固定観念をクリエイティブに越えていこうとする姿勢もまた、こうした「わからない」の探求に繋がっています。そして、現代美術館はまさにそうした未知の世界に出会い、学ぶ「世界の教室」とも言えるでしょう。

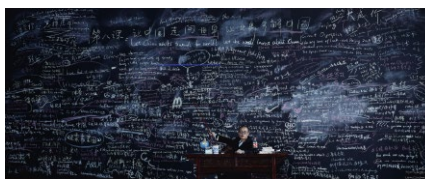
森美術館開館20周年を記念する「ワールド・クラスルーム：現代アートの国語・算数・理科・社会」は、学校で習う教科を現代アートの入口とし、見たことのない、知らなかった世界に多様な観点から出会う試みです。展示会のセクションは「国語」、「社会」、「哲学」、「算数」、「理科」、「音楽」、「体育」などに分かれています。実際それぞれの作品は複数の科目や領域に通じています。また、企画展としては初めて、出展作品の半数以上を森美術館のコレクションが占める一方、本展のための新作も披露され、50組を超えるアーティストによる学びの場、「世界の教室」が創出されます。

### 出展アーティスト ＊アーティスト名のアルファベット順

アイ・ウェイウェイ（艾未未）、青山 悟、ヨーゼフ・ボイス、サム・フォールズ、藤井 光、シルパ・グプタ、畠山直哉、スーザン・ヒラー、ジャカルタ・ウェイステッド・アーティスト、風間サチコ、菊地智子、ヤコブ・キルケゴール、ジョセフ・コースス、ディーン・Q・レ、李禹煥（リ・ウファン）、パーク・マッカーサー、ミヤギフトシ、宮島達男、宮永愛子、森村泰昌、奈良美智、パンクロック・スラップ、ソピアップ・ピッチ、アラヤー・ラートチャムルンスック、ヴァンディー・ラッタナ、ハラール・サルキシアン、笹本 晃、瀬戸桃子、杉本博司、田島美加、ロデル・タパヤ、ツァイ・チャウエイ（蔡佳葳）、梅津庸一、ワン・チンソン（王慶松）、ヤン・ヘギュ、イー・イラン、米田知子、ほか



【左】  
宮島達男  
《Innumerable Life/Buddha CCIDD-01》  
2018年  
発光ダイオード、電子回路、電線、スチール、ステンレス、変圧器、LED  
「TimeHundred」タイプ(赤) 100プレート  
251.7×251.7×15 cm  
所蔵：森美術館(東京)  
Courtesy: Lisson Gallery  
撮影：表 恒匡



【右上】  
ヤン・ヘギュ  
展示風景：「ヘギュ・ヤン・コーン・オブ・コンサーン」  
マニラ現代美術デザイン美術館 2020年  
撮影：アット・マキュランガン ※参考図版

【右下】  
ワン・チンソン(王慶松)  
《フォローミー》  
2003年  
Cプリント  
60×150 cm  
所蔵：森美術館(東京)

プレスリリース お問い合わせ 森美術館広報事務局（共同ピーアール内）：日比、松川、花上  
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp

## 森美術館開館20周年記念展 私たちのエコロジー

会期：2023年10月18日(水)－2024年3月31日(日)

会場：森美術館（六本木ヒルズ森タワー53階）

主催：森美術館

企画：マーティン・ゲルマン(森美術館アジャクト・キュレーター)

椿 玲子(森美術館キュレーター)

徳山拓一(森美術館アソシエイト・キュレーター)

産業革命以降人類が地球に与えた影響は、それ以前の数万年単位の地質学的変化に匹敵すると言われていいます。環境危機は喫緊の問題であり、現在、国際的なアートシーンにおいても重要なテーマとして多くの展覧会が開催されています。

今日の環境危機を引き起こした人間中心主義を脱し、私たち人間と他のすべての存在との新たな関係性を構築する、持続可能な未来の可能性は残されているのでしょうか。本展では「エコロジー」を調和や循環として広く捉え、人間同士のコミュニティ、人間をも含む生態系、人間が認知できない世界の在り様も包含する新しい「循環」の在り方について考えます。タイトルの「私たちのエコロジー」は、私たちとは誰か、地球環境が誰のものなのか、という問いも投げかけています。

展示では、歴史的な作品から本展のための新作まで多様な作品を紹介します。例えば、地球温暖化と経済格差への抗議として、アグネス・ディーンズが資本主義を象徴するニューヨークのマンハッタンに小麦畑を出現させた1982年の作品は、今日の世界を見つめ直す機会を提供してくれます。また、高度経済成長の裏で環境汚染が問題となった1950～70年代の日本で制作・発表されたアートを再検証し、現在の環境問題を日本という立ち位置からも見つめ直します。さらに、森美術館をひとつの環境と捉え、可能な限り輸送を減らし、資源を再生利用するなど、エコロジカルな展覧会制作を試みます。

本展は、現代アートとアーティストたちがどのように環境問題に関わってきたか、関わることを考えるのかを考察しながら、地球全体の持続可能な未来の残された可能性を探求しようとするものです。



アグネス・ディーンズ  
《小麦畑—対立：バッテリー・パーク埋立地(マンハッタン、ダウンタウン)—  
—小麦畑に立つアグネス・ディーンズとともに》  
1982年  
Courtesy: Leslie Tonkonow Artworks + Projects(ニューヨーク)  
撮影: John McGrail

最新のプレス画像は、こちらの URL より申請、ダウンロードいただけます。

<https://tayori.com/f/fy2023/>

プレスリリース お問い合わせ 森美術館広報事務局(共同ピーアール内): 日比、松川、花上  
Tel: 03-6264-2039 E-mail: mam-pr@kyodo-pr.co.jp